中谷 愛の「世界の手仕事」第十三回

荒野に咲く花 中央アジアの手仕事

文 中谷 愛　写真 西遊旅行

中央アジア。アジアとヨーロッパを繋ぐこの地には、東西を行き交う旅人や物資と共に、各地から染織・刺繍などの手仕事の技術が伝えられました。乾燥した大地にひときわ映える、鮮やかで大胆な色柄の絣や刺繍の布たち。今回は、そんな中央アジアの手仕事についてご紹介します。

絣布アトラス

タジキスタンやウズベキスタン、キルギスなどでよく見られる布アトラス。「汗の朱子＝ハン・アトラス」とも呼ばれるこの布は、艶のあるシルクの絣布で、日本の矢絣に似た大胆な柄が、白・黄・紫・赤・黒など鮮やかな色使いで織られています。100％絹で織られたものがアトラス。対して、絹と綿が半々のものはアドラスと呼ばれます。

絹は5世紀ごろホータンから中央アジアにもたらされました。そして、11世紀はじめには経絣の製品が作られ、18世期には染織街区が生まれました。染織街区では、デザインや糸紡ぎ、染色、仕上げなどの各工程を専門の男性職人が分業で受け持ちました。染色に使う色は、西洋茜や石榴の皮、インド藍など。19世期～20世期はじめごろからは、人工染料も使われるようになりました。

染色街区では、藍を窯で煮出して染めるのはブハラの職人、常温で染めるのはユダヤ人の職人といったように、色の染め方によって職人の民族が分けられていました。そして、それぞれがその方法を秘伝としていました。人々は、布の色をできるだけ長く保たせたいと、卵白と澱粉を混ぜた液を染み込ませ、きぬたで叩くといった工夫をしていました。現在では、色落ちしにくい人工染料が使われるほか、絣の柄のプリント生地も作られています。

アトラスの布は、衣服のほかに壁掛け、礼拝用や魔除け用など、様々な用途で使われてきました。ウズベク人やタジク人の女性は、アトラスやアドラスでできたワンピースやズボン、帽子を着用します。眉毛を一本に繋げる化粧をし、細い三つ編みを何本も垂らす伝統的なファッションは、都会では最近なかなか見かけられなくなりました。

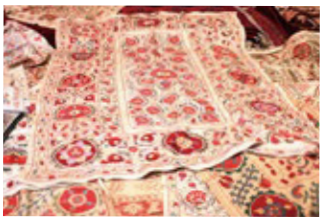
アトラスの大胆な柄は、花や、蛇、月など、生活の身近にあるものや、魔除けの意味を持つものをモチーフにしています。柄には毎年流行があり、近年は孔雀の羽や麦の柄、経糸の一部に金糸を使ったもの、ラメやラインストーンを取り付けたものなど、新しいアトラスが次々に生まれています。日本では少し派手かなと思ってしまうアトラスの柄ですが、中央アジアの厳しい自然を背景にすると、まるで美しい花のように映えます。少しでも生活に色彩を加えたいと、人々は明るく鮮やかな色柄のアトラスを着てきたのです。

右／アトラスを纏うウズベキスタンの女性
左／天然色素で染めた時代のアトラス
右下／様々な色柄のスザニ

刺繍布スザニ

風景を彩るのがアトラスなら、家の中を彩るのが手刺繍の布スザニです。スザニという名前には、「布を刺す」という意味があり、地の布が見えなくなるほどびっしりと刺されるのが特徴です。かぎ針を使うチェーンステッチのほか、サテンステッチやクロスステッチのものもあり、国や地域ごとに色柄に違いがあります。刺繍の模様は月や星、花などの自然のモチーフのほか、多産を表す石榴の柄も多く見られます。

家に女の子が産まれると、母親は娘の嫁入り道具のためにスザニを準備し始めます。娘自身も、嫁入り前には母親から刺繍を習います。

スザニは住居の内側一面に掛けられ、家の中を彩ると同時に嫁ぎ先の娘を見守ります。使われる色は赤やオレンジ色などの明るい色が好まれます。これは、薄暗い家の中を少しでも明るく見せるためだといわれています。

シルクロードの伝統工芸と生活にふれる
中央アジア テキスタイル紀行
東京・大阪発着 | 9日間